

所なしとて感心せしが、後に堯山堂外紀に、京師毎正旦、主人皆出賀、惟置白紙簿并筆研於几上、賀客至書其名、無迎送也といへるを見て、澆薄のさま今日の如きに、またも感せり。

〔鹽尻〕諸州節序佳例 諸州年始節序の祝各不同、古よりの風俗ありていと異也、南都は富家貧戸とも、元三家の入口の庭に圍爐裏を構へ、福わらあつく其上に疊しき、家の主夫婦そこに出て拜す、年禮の客を接す、門には必むしろを垂れて賀客案内すれば、請じ入家の妻自ら餅やくまねして雜煮に入て饗す、客庭竈の祝にあひたるとして謝す、伊勢宇治邊は年禮の客來れば、先をしきにさんきちやるとして、二寸計りのわりたる木二三枚、わらにて結びたるを置、田作かうじなどおき交へて、これを年始の饗とし、つぎにいもがしら三ツ椀に入れてと寶珠云すゑわたし、小紙壹帖を以て引出物とす、家の貧富により紙の大小多少あり、

〔狂歌合〕永正五年正月二日

三番 左

御禮とてむつれつ、人のくるのみぞあたら閑居の春にはありける

〔山之井春〕正保二年の元日に

屋信

門松にはかま腰する禮者かな

〔雅筵醉狂集春〕題えらす

不鎖玄關春幾世 長閑禮者物申聲

〔改正月令博物筌正月〕俳 樂人やいつまで残す春の禮遠水 年立や家中の禮は星月夜其角 狂

禮に來て御慶といへば御慶とこたふ扱はあふむのとり貞柳の年哉

〔日本風土記時令〕新正名曰少完之、以正字呼爲少音、完之即月也、敬天地、祀鬼神、以松栢插門、乃取長青之好、朔日賀歲、從尊至卑、禮節如口云、紅面的倒、乃陽光普照之言、千首萬世、乃千秋萬歲、華蓋